

February 2023
会員連絡 No.31

The Society of Cardiovascular Endocrinology and Metabolism

日本心血管内分泌代謝学会

- ご挨拶：理事長/退任理事
- ご案内：第27回日本心血管内分泌代謝学会学術総会
- ご報告：第26回日本心血管内分泌代謝学会学術総会
受賞者紹介 高峰譲吉賞/高峰譲吉研究奨励賞/中尾一和賞/若手研究奨励賞
第26回評議員会・総会
- 各種名簿

【第27回日本心血管内分泌代謝学会学術総会】

会長：下澤 達雄

国際医療福祉大学医学部 臨床検査医学
学会 URL : <https://www.cvem2023.org/>

日本心血管内分泌代謝学会
事務局

〒600-8441 京都市下京区新町通四条下る四条町343番地1
タカクラビル 6階 一般社団法人日本内分泌学会 内
TEL : 075-354-3562 FAX : 075-354-3561 E-mail : cvem@endo-society.or.jp



目次

理事長のご挨拶	2～3
第 27 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会開催のご挨拶	4
理事退任・功労評議員就任のご挨拶	5～6
第 26 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会 開催報告	7～8
第 26 回日本心血管内分泌代謝学会受賞者プロフィール	
・ 第 26 回高峰譲吉賞	9～10
・ 第 26 回高峰譲吉研究奨励賞	11～12
・ 第 4 回中尾一和賞	13～14
・ 第 26 回若手研究奨励賞	15～19
名簿	
理事・監事・幹事	20
名誉会員	21
功労評議員	21
評議員	21
2022 年度新入会会員	21
第 26 回日本心血管内分泌代謝学会評議員会・総会議事録	22～26

コロナ時代を乗り越えて： CVEM の新たな“縁結び” トライアル

慶應義塾大学医学部 腎臓内分泌代謝内科

伊 藤 裕

2023 年が幕を開けました。わたくし、伊藤裕は、2019 年、日本心血管内分泌代謝学会（The Society of Cardiovascular Endocrinology and Metabolism, The CVEM Society）第 8 代理事長を拝命いたしました。2021 年より、二期目を務めさせていただいております。ブレることなく、「CVEM は、Non-Communicable Diseases (NCDs) 医学の王道」であるとの信念のもと、CVEM の立っている岐路を正しく認識し、その活路を模索し、活動させていただいております。ここに謹んで、皆様方のご支援を賜りたく存じます。

2020 年より猛威をふるい続け、いまだ収束とはいえない COVID-19 ではありますが、弱毒化のなか、我々はコロナとの共生の道を歩み始めています。2023 年は、卯年、うさぎといえば、因幡の白兎が有名です。この兎は、出雲の国の主神である大国主大神と八上比売（やかみひめ）を結び付け、ここに出雲大社が生まれました。わたしは、全国の神社めぐりが趣味の一つですが、わたしが感じ取れる各神社のパワーのなかで、出雲大社は飛びぬけて最大で、今年はその力をお借りして、CVEM 発展に尽力したいと考えております。よろしく願いいたします。

学会は、コロナとの共生のなか、CVEM の New Normal を模索しております。20 世紀末、日本人科学者により発見された多くの心血管ホルモンに関する研究をベースに設立された CVEM ではありますが、今日まで、ナトリウム利尿ペプチド、エンドセリン、アドレノメデュリンやオレキシンなどが極めて迅速に臨床応用されてきました。最近では、レニンアンジオテンシン系抑制とナトリウム利尿ペプチド系の作用増進作用を持つ ARNI（アンジオテンシン受容体ネプリライシン阻害剤）が登場し、心不全、さらに、高血圧への臨床適応がなされました。また、GLP-1 や GIP などインクレチンが、メタボリックドミノの源流にある肥満に対しても一定の作用を示し、心血管保護作用も発揮することが明らかとなり、CVEM 領域におけるホルモンの新たな意義が注目されています。このように CVEM 領域は確実に進歩し、日本は世界に冠たる地位を占めていますが、専門医制度の



変革の中、特定の臨床疾患を有しない臨床学会としての問題点を抱えています。

第 26 回（2022 年度）学術総会は、熊本大学大学院生命科学研究部 腎臓内科学講座、向山政志会長のもと、わたくしが会長を務めた、国際高血圧学会（ISH）2022 京都のサテライトとして 2022 年 10 月 12 日（水）（会場：京都国際会館）に、「CVEM, the Past, Present, and Future」のテーマのもと、第 18 回大会（横浜、梅村敏会長）以来 8 年ぶりに単独で開催されました。ISH のサテライトとして、国際色豊かに、招待講演やシンポジウムは英語で口演がなされ、129 名の方が参加されました。ISH には、海外からも 600 名ほどの方が現地参加されましたが、その方も会場に来られたと聞いております。特別講演は、国立循環器病研究センター理事長の天津欣也先生による心臓の炎症と除去機構に関する講演がなされ、シンポジウムでは、心不全と臓器連関、向山会長の専門である腎臓のホメオスターシス維持機構、メタボリックシンドロームと抗加齢、再生という魅力的な最先端の研究が議論されました。

NCDs 全般にわたる疾患群をカバーする極めて横断的な学問領域を扱う CVEM の特性を鑑み、最近では、CVEM 学術総会は、他学会との合同で開催され、より多くの方との交流のなか、より豊富な情報を得ることが目指されてきました。WITH コロナ時代となり、WEB 開催が常態となり、その利点も多くの方が体感するようになりました。一方で、最近は、コロナとの共生ムードのなかで、現地開催が再開され、フェースツーフェースの良さも改めて認識されています。ISH も国内外から 1500 名ほどの方々が現地に来られ、みなさん久々の現地での議論を心から楽しんでおられました。このように流動的な状況のなか、今後 CVEM をいかに存続、活性化するかは、依然大きな課題であります。これまで、CVEM を、単体で WEB 開催する意見がでて検討されてきています。学会員が、専門医制度の縛りの中、それぞれの専門領域の学会の参加を優先するあまり、CVEM への参加が抑制される傾向があります。WEB での開催であれば、参加が容易になるのではないかと、練られたネットでの意見交換の場が作られれば、若手同士のつながりを強化できるのではないかと期待があります。一方、WEB 開催にすると、ただ聴講するだけになりがちで、若い人達が学会にコミットして運営に参加しようという意思が育たない、そして、なにより再確認されたフェースツーフェースの良さが失われるという懸念もあります。

そこで、第 27 回（2023 年度）学術総会会長は、デジタル技術に通じておられる下澤達雄理事（国際医療福祉大学 成田病院 臨床検査科）にお務めいただくことになりました。下澤先生はこれまでにない全く新しい学会開催形態を計画されました。すなわち、総会開催を特定の一時期に設定することなく、通年で、複数回にわたり、WEB 配信する形で総会を実施するというものです。通年に亘り CVEM 領域での最先端の知見に触れ、そして、より多くの機会に学会員の議論が生まれることを期待しての試みであります。2022 年 12 月にすでに第一回の配信が開始されております。Slack を用いた連絡、そして質疑応答がなされ、学会現地会場での交流とは次元の異なった、これまで体験したことのない、新たな CVEM の仲間の交流が始まっていることをわたしも実感しております。学会参加費もきわめて安価なものとなっております。2023 年を通じて、この試みがどのように成長していくのか大変楽しみです。その成果をもとに、2024 年以降の CVEM がブラッシュアップされていくことを期待しております。

出雲大社は、縁結びの神として有名ですが、これは男女の関係にとどまらず、生きとし生けるものが共に豊かに栄えていくための貴い結びつきを叶える、とされています。新生 CVEM が新たな CVEM 学会員の縁結びを創ることを願っております。学会員の皆様におかれましては、このような学会の現状をご理解いただき、引き続き、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



第 27 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会 開催のご挨拶

会長 下澤 達雄（国際医療福祉大学医学部）

第 27 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会（CVEM2023）の学術総会はオンライン会議システムを用いて、毎月一回水曜日、夕方のひと時 17 時 30 分から、サイエンスをお楽しみいただいております。

毎回ホットトピックスを提供いただく KeyNote Lecture と一般演題を中心に企画を進めております。第 1 回から第 3 回まで活発な討論が行われてきましたが、引き続き一般演題の登録は随時受け付

けます。データがでたら抄録をお送りください！

全国版ラボカンファのような気持ちで気軽にご参加いただき皆さんで建設的な意見交換をしたいと思います。ライブで質問しにくい場合を考えて SLACK も活用しております。

留学生にも発表していただきたいので時には英語セッションも用意しておりますし、留学生は参加費無料です。積極的なご参加をお待ちします。

3 月以降は以下の予定です。Mark your calendar!

3 月 15 日、4 月 12 日、5 月 10 日、6 月 7 日、7 月 12 日、

8 月は夏休み！9 月 6 日、10 月 11 日、11 月 8 日（水）

年間パス（3,000 円）、各回のみ（500 円）でご視聴いただけます。また日本内分泌学会専門医の単位も取得可能です。

ご登録いただきますと参加 URL をお知らせします。

詳細は Web をご参照ください。

Website: <https://www.cvem2023.org/>

Facebook: <https://www.facebook.com/CVEM2023>

Tweet は #CVEM、#CVEM2023

抄録は cvem2023@gmail.com までお送りください。

CVEM2023 Website

CVEM2023 Facebook

抄録登録



プログラム委員会：山城 義人（国立循環器病研究センター）、有馬 勇一郎（熊本大学）、
田中 愛（信州大学）

学会事務局担当：国際医療福祉大学医学部 下澤 達雄、小倉 彩世子

斎藤 能彦 先生（奈良県立病院機構奈良県西和医療センター）



略歴

1981 年	奈良県立医科大学卒業
1981 年	京都大学医学部附属病院 研修医
1982 年	浜松労災病院内科 医員
1985 年	京都大学医学部附属病院第二内科 医員
1992 年	国立循環器病センター研究所病因部高血圧研究室室長
1995 年	京都大学医学部附属病院第二内科助手
1999 年	京都大学大学院医学研究科臨床病態医科学講座助教授
2002 年	奈良県立医科大学循環器内科学（旧 第1内科）教授
2022 年	奈良県立病院機構奈良県西和医療センター 総長

2022 年の第 26 回日本心血管内分泌代謝（CVEM）学会学術総会を持ちまして、理事を退任いたしました。私は、本学会で研究のイロハ、科学の面白さ、また、現在でいうところの translational research を勉強させていただき、私は CVEM 学会に育てていただきました。

私は、2011 年に第 14 回 CVEM 学会を第 14 回の国際内分泌学会のサテライトシンポジウムとして国際シンポジウムの形で開催させていただきました。また、2011 年から 2015 年まで理事長のお役目をいただきました。2015 年には、関連学会と Cardiovascular Metabolic Week (CVMW) として 4 つの学会の合同開催を実施いたしました。現在 CVEM は CVMW には加わっていませんが、また、一緒に開催される日が来ることを願っております。

さて、CVEM 学会が設立された経緯を少しお話しさせていただきます。1984 年に故松尾壽之先生と寒川賢治先生が心房性ナトリウム利尿ペプチド（ANP）を発見されました。この発見により、それ以前は、ポンプ器官としてのみ認識されていた心臓が内分泌器官でもあることが明らかになり、心血管内分泌学がスタートいたしました。ANP の発見に前後して、1978 年に R.F. Furchgott により血管内皮細胞からは Endothelium-derived Relaxing Factor: EDRF（のちに NO と同定）が、1988 年には柳沢正史先生によりエンドセリンが、さらに 1993 年には寒川賢治先生、北村和雄先生によりアドレノメデュリンが発見され、すでに研究が盛んになっていたレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系などを加え、心臓血管ホルモン研究が一つのピークを迎えつつありました。ANP 研究は、1980 年代、1990 年代前半には ANP 研究会が毎年開催され、ホットなディスカッションが繰り広げられておりましたが、ANP 研究会が発展的に解消され 1996 年 CVEM 学会が設立され、翌 1997 年第 1 回学術集会が開催されました。

現在では、心臓や血管病態生理を理解するためには、神経体液性因子や、細胞内情報伝達系の理解が必須であることは、万人が知るところですが、当時は、日本循環器学会では当該分野の研究はまだ minor であり、CVEM 学会が当該分野研究の中心でありました。

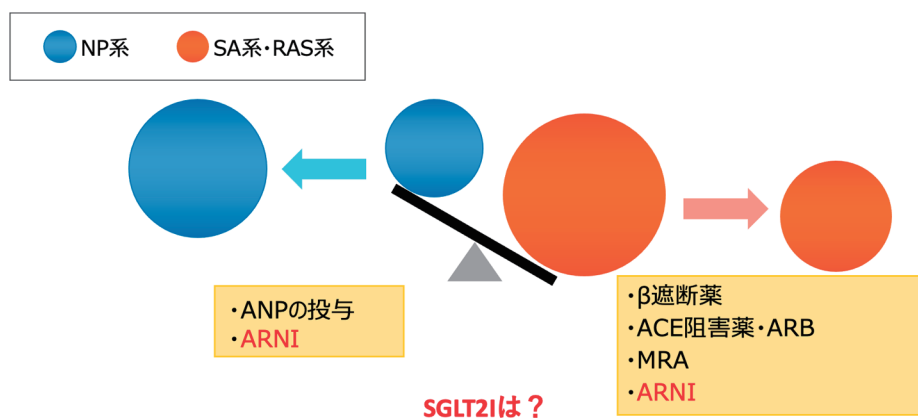
CVEM は心血管の生理、病態生理の理解に深く貢献しただけでなく、この分野からは、診断薬や治療薬が多く開発されたことも大きな特徴です。最近では、経口血糖降下薬として開発された sodium-glucose transporter 2 阻害薬が、新しいクラスの心不全治療薬として、さらに、初めての慢性腎臓病の治療薬として注目され、CVEM 分野の治療薬といえると思います。しかし、

SGLT2 阻害薬の最も興味深いところは、心不全治療や腎機能改善効果の分子機序がはっきり解明されていないことでもあります。CVEM の研究ターゲットとして最適のテーマの一つかと考えております。

CVEM は、内分泌、循環器学、腎臓学と幅広い分野を神経体液性因子を中心に理解する臓器横断的学問であります。ヒトの体は、ある臓器が単独で制御されていることはありません。CVEM のような臓器横断的なアプローチが真の意味での病態生理の解明に繋がると信じております。我が国の生活習慣病とくに循環器系基礎研究の置かれている状況は必ずしも楽観できるものではありません。若い研究者をリクルートし CVEM が発展されることを祈念致しております。私は、昨年 3 月に大学を退任し、基礎研究の第一線からは離れておりますが、ANP をはじめ神経体液性因子の心不全での意義をさらに考えていきたいと思っております。神経体液性因子的に生体の仕組みを考えますと、システムのバランスとその破綻ということかと思えます (図)。

永い間有難うございました。

神経体液性因子から見た心不全治療薬のコンセプト



Saito, Y.: Intern.Med. 46(16),1291-1294,2007より改変

CVEM2022 を終えて

第26回 日本心血管内分泌代謝学会学術総会

会 長：向 山 政 志

会長付幹事：泉 裕一郎

第26回日本心血管内分泌代謝学会学術総会（CVEM2022）（会長：熊本大学大学院生命科学研究部腎臓内科学 向山政志）は、8年振りの単独開催という形で2022年10月12日（水）、国立京都国際会館を会場として開催されました。総会のテーマを“CVEM, the Past, Present, and Future”とし、直後から開催される国際高血圧学会（ISH2022 Kyoto）に向けて先陣を切るという意味合いを込め、ポスター一般演題と企業共催セミナーを除く招待講演、指定講演およびYIA 審査講演を全て英語での発表としました。さらに、コロナ禍の終息がなかなか見通せない状況の下、WEB配信とのハイブリッド開催と致しました。

開催日程と形式は以下の通り実施されました。

2022年10月12日（水） 現地発表（一部リモート登壇）

2022年10月19日（水）～2022年11月1日（火） オンデマンド配信

特別講演では、大津欣也先生（国立循環器病研究センター理事長）から「Cardiac inflammation and degradation systems」というタイトルでご講演いただき、基礎研究で得られた知見から心不全診療への橋渡しを追求する translational research の神髄を存分に語っていただきました。会長講演では「CVEM, natriuretic peptides, and metabolic kidney disease」というタイトルで、CVEM、ナトリウム利尿ペプチドおよび心腎連関に関する研究の流れと今後の展望について講演がなされました。

シンポジウムとして指定シンポジウムを3つ、若手シンポジウムを1つ企画しました。シンポジウム1では「心不全、多臓器連関と生体制御：Heart failure, organ cross-talk and cardiovascular regulation」のテーマで、名越智古先生（東京慈恵医大）、尾上健児先生（奈良県立医大）、堀江貴裕先生（京都大）、武田憲彦先生（自治医大）の4名から、代謝や新規分子を軸とした心不全の新たな機序と臓器連関に関する最新の知見の発表がなされました。シンポジウム2では「腎臓における体液・電解質調節の新知見：Advances in fluid-electrolyte homeostasis by the kidney」のテーマで、北田研人先生（香川大）、森雄太郎先生（東京医科歯科大）、横井秀基先生（京都大）、Jens Titze 先生（Duke-NUS Medical School, Singapore）の4名から、腎臓を中心とした体液・循環調節の新しい側面が紹介されました。特に、Titze 先生からは高血圧の際の体液調節に関して皮膚を含む従来と全く異なる仮説をご講演いただき、総会に花を添えました。さらに、シンポジウム3では「メタボリックシンドロームと抗加齢・再生医学：Metabolic syndrome, anti-aging and regenerative medicine」のテーマで、木内謙一郎先生（慶應大）、伊藤美智子先生（名古屋大）、吉田陽子先生（順天堂大）、人見浩史先生（関西医大）の4名から、抗加齢・再生・時間医学など多岐にわたって最新の知見が報告されました。

また、若手主催シンポジウムとして「これからのCVEM: CVEM and beyond」と題して3名

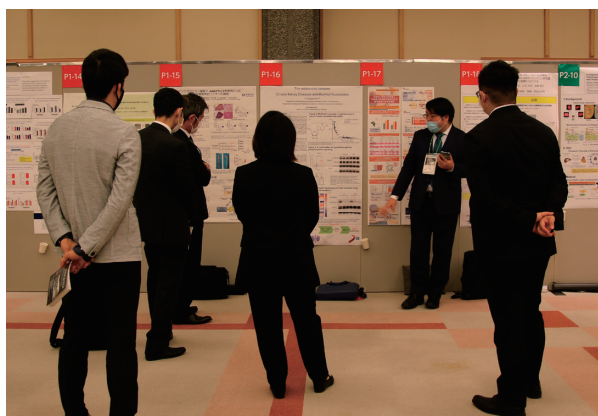
の方々（米代武司先生、佐藤有紀先生、田中都先生）から発表いただき、特に佐藤先生は米国 Mayo Clinic からの発表でした。若手の先生方の活発な研究発表と討論は、将来に向けて CVEM の新たな展開を期待させる充実した内容でした。YIA 審査講演では 10 名の候補者からそれぞれ英語での発表がなされ、いずれも甲乙つけがたい素晴らしい内容でしたが、最終的に 5 名に賞が授与されました。

共催セミナーでは、MR 拮抗薬、SGLT2 阻害薬および ARNI に関するトピックスを企画し、最新の基礎および臨床的側面からみた知見の発表がなされました。特に、ARNI に関しては Luis M. Ruilope 先生から高血圧に対する臨床成績と今後の展開のご講演をいただきました。

なお、各賞の受賞者は以下の通りです。第 26 回高峰譲吉賞は吉村道博先生（東京慈恵医大）、高峰譲吉研究奨励賞は遠山周吾先生（慶應大）、中尾一和賞は山城義人先生（筑波大）、また YIA は伊藤祐規先生（大阪大）、尾崎祐太先生（名古屋大）、藤本大介先生（熊本大）、南喜人先生（京都府立医大）、山本正啓先生（熊本大）（五十音順）の 5 名の先生方です。誠にありがとうございます。

今回は前々回から続くコロナ禍での開催ではありましたが、可能な限り現地参加をお願いし先生方と in person での発表と討論ができるよう努力しました。後に ISH が控えていることもあり、極めてタイトなスケジュールの中での開催となりましたが、結果的に参加総数は 120 名を超え、そのうち現地に 90 名ほど参加していただきました。関係者一同、先生方のご協力に深く感謝申し上げます。

次回、第 27 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会（CVEM2023）は下澤達雄先生（国際医療福祉大学成田病院 臨床検査科）を会長として、完全オンラインによる従来とは異なった形式での開催（2022 年 12 月 7 日から月 1 回開催を基本）となります。全く新しい試みの学会開催への期待とともに、多くの皆様のご参加、ご協力をどうかよろしくお願い申し上げます。



第 26 回日本心血管内分泌代謝学会研究賞 受賞者プロフィール

第 26 回日本心血管内分泌代謝学会研究賞を受賞されました先生方のプロフィールを掲載いたします。

----- 高峰譲吉賞受賞者 -----

吉村 道博 先生（東京慈恵会医科大学 内科学講座循環器内科 講座担当教授）

受賞研究テーマ

「心不全および虚血性心疾患の内分泌代謝学的研究」
(Pathophysiological studies of heart failure and ischemic heart disease from the perspective of endocrinology and metabolism)



略歴

昭和 61 年（1986 年）	宮崎医科大学卒業
昭和 61 年（1986 年）	熊本大学医学部附属病院循環器内科研修医
昭和 62 年（1987 年）	熊本市市民病院内科研修医
昭和 62 年（1987 年）	熊本労災病院内科研修医
昭和 63 年（1988 年）	熊本中央病院循環器内科レジデント
平成 5 年（1993 年）	熊本大学大学院医学研究科修了
平成 5 年（1993 年）	熊本大学医学部循環器内科医員
平成 6 年（1994 年）	熊本大学医学部循環器内科助手
平成 12 年（2000 年）	熊本大学医学部循環器内科講師
平成 13 年（2001 年）	熊本大学医学部循環器内科助教授
平成 19 年（2007 年）	東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科 講座担当教授

—— 受賞によせて ——

この度、高峰譲吉賞拝受の栄に浴し、日本心血管内分泌代謝学会の伊藤 裕 理事長、褒賞関係の先生方、そして私のこれまでの研究生活を支えてくださった皆様方すべてに心より感謝申し上げます。

私は、宮崎医大在学中に故松尾壽之先生と寒川賢治先生らが発見された ANP の特別講演が開催されたことをよく覚えております。心臓からホルモンが分泌されることを聞き大変驚きました。卒業後、私は熊本大学循環器内科に入局致しました。泰江弘文教授が主宰されていた教室で冠攣縮の研究、特に冠攣縮の遺伝的要因の研究をさせて頂き、eNOS 遺伝子多型とその意義を報告しました。その頃より京都大学 中尾一和教授の教室の皆様には大変お世話になり、他にも ANP・BNP を中心とした心不全関連の研究で熊本大学と京都大学の共同研究が発展し、大変光栄なことでありました。

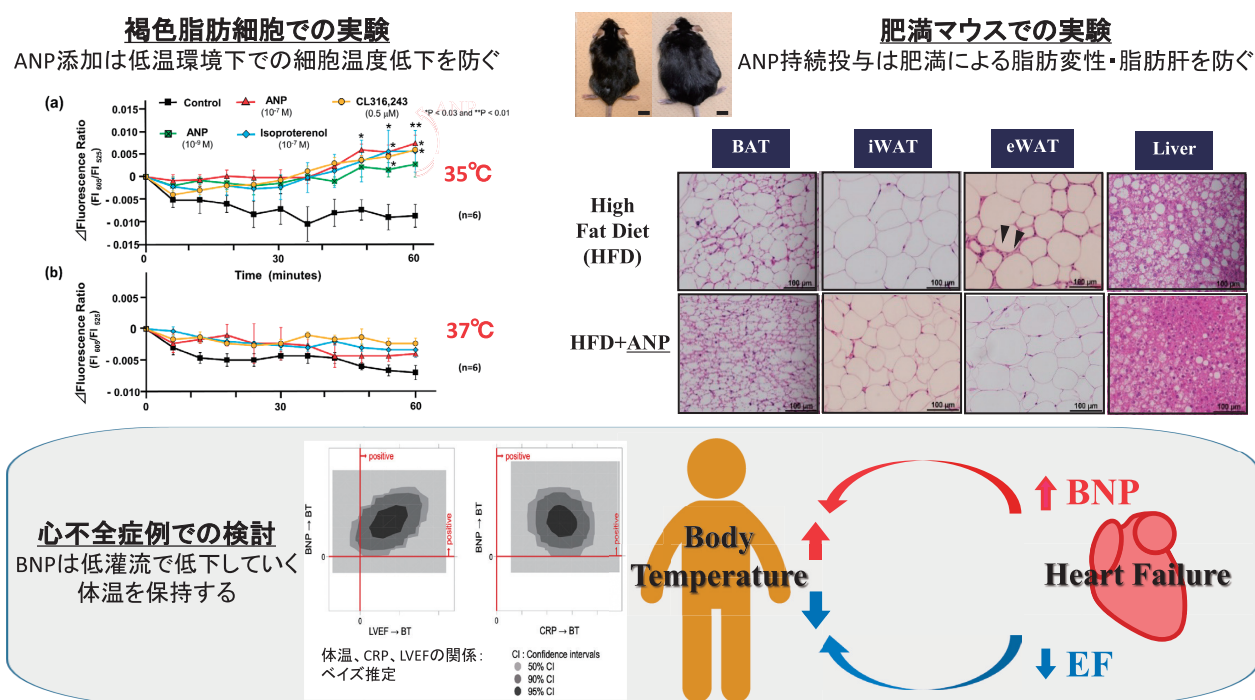
熊大時代から RAA 系の研究も行っており、微量ながらヒト心臓からアルドステロンが分泌さ

れること、さらには ACTH や DHEA も心臓から僅かに分泌されることも報告しました。まさに心臓は内分泌器官であることを実感した次第です。また、動物実験でアルドステロンが ACE 遺伝子発現を上げることなども報告しました。

慈恵医大に赴任してからもアルドステロンの研究を続け、マウス心臓におけるそのゲノム作用および非ゲノム作用を報告しました。最近、心臓のエネルギー代謝に関する研究に注力しております。まず、ANP・BNP が糖や脂肪の代謝にも関与し、肥満による脂肪毒性を軽減し、エネルギー代謝を亢進させることを報告しました。そして ANP・BNP が熱産生（体温維持）にも深く関わっていることを動物実験や心不全症例で確認しました。次に、尿酸・核酸代謝の研究も行い、マウス不全心におけるキサンチンオキシダーゼの存在とその活性化を示しました。そして、肥満マウスにおいて URAT1 が腎臓のみならず脂肪細胞や肝臓にも存在し、URAT1 を阻害することで脂肪変性や脂肪肝への進展が抑制されることを報告しました。続いて、甲状腺ホルモンと心臓との関係について、心不全症例で Low T3 syndrome が BNP 高値と深く関連があることを示しました。T3 や T4 の代謝産物である T1AM が BNP を強く発現させることも動物実験で示しました。

私は、ANP・BNP を始めとした複数のホルモンを通じて、全身から心臓病を診ることの重要性に気づきました。慈恵医大には建学の精神として「病気を診ずして病人を診よ」という言葉があります。病んでいる「臓器」のみを診るのではなく、病に苦しむ人に向き合い、その人そのものを診ることの大切さをこの言葉は表しています。私の研究もこの精神に合致するところがあり、慈恵医大に在籍できたことを誇りに思う次第です。

末尾になりますが、今回の受賞に感謝しつつ、日本心血管内分泌代謝学会の益々のご発展を心より祈念申し上げます。



遠山 周吾 先生（慶應義塾大学医学部循環器内科 専任講師）

受賞研究テーマ

「多能性幹細胞の代謝機構に基づく心筋再生治療法の開発」
(Metabolism-Based Cardiac Regenerative Therapy with Human Pluripotent Stem Cells)



略歴

平成 18 年（2006 年）	慶應義塾大学医学部卒業
平成 18 年（2006 年）	東京都済生会中央病院初期臨床研修医
平成 23 年（2011 年）	日本学術振興会特別研究員（DC2）
平成 25 年（2013 年）	慶應義塾大学大学院医学系研究科博士課程修了 （学位取得）
平成 25 年（2013 年）	日本学術振興会特別研究員（PD）
平成 30 年（2018 年）	慶應義塾大学医学部循環器内科（臓器再生医学） 特任講師
令和 2 年（2020 年）	慶應義塾大学医学部循環器内科専任講師

—— 受賞によせて ——

この度は高峰讓吉研究奨励賞を賜り、誠にありがとうございます。日本心血管内分泌代謝学会の諸先生に厚く御礼申し上げます。

私は、ヒト iPS 細胞が誕生した翌年の 2008 年に大学院生として、当時生医学教室で教授をされていた福田恵一先生の下で研究をスタートさせ、その後 14 年に渡り“ヒト iPS 細胞を用いた心臓再生医療の臨床応用”を目指して研究を続けて参りました。

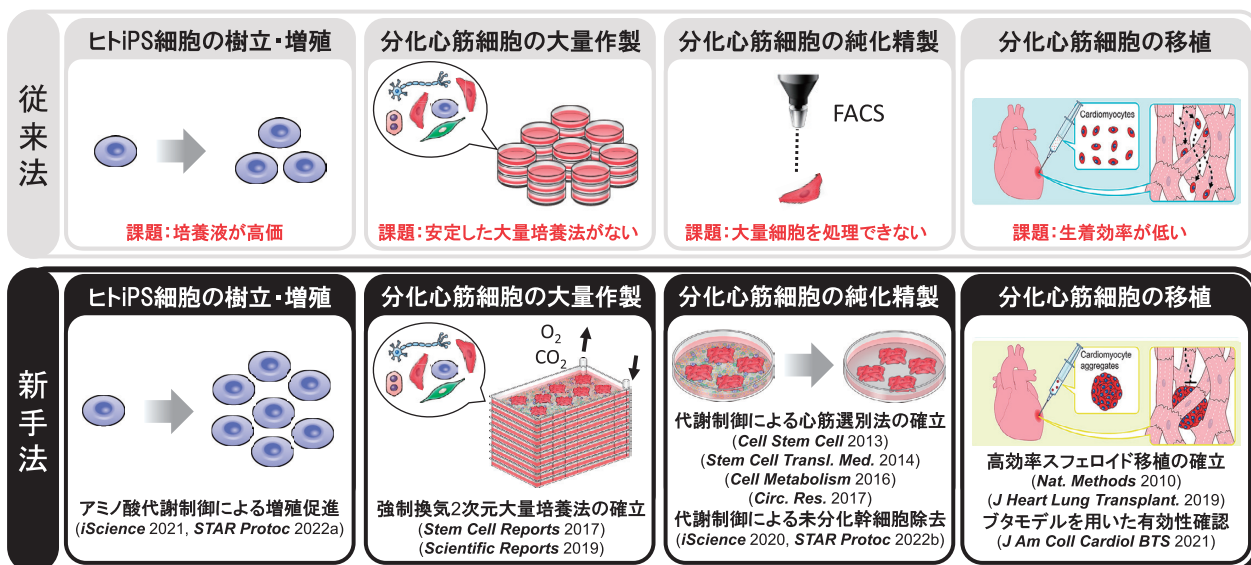
大学院時代は、ヒト多能性幹細胞から心筋細胞を作製した際に生じる未分化幹細胞が、腫瘍化を引き起こすことが大きな問題となっていたため、心筋細胞を選別する技術の確立をテーマに研究を遂行しました。世界中で誰も成し遂げることができていませんでしたが、この難題に対して、“心筋細胞のみが生存可能な培養環境を探索する”というこれまでにないアプローチにより心筋細胞のみを選別することに世界で初めて成功しました（*Cell Stem Cell* 誌 [2013 年] に報告）。

その後は、日本学術振興会特別研究員（PD）として、引き続き心筋細胞移植治療を実現べく研究に励んでおりましたが、残念ながら大量の心筋細胞を移植した場合には心臓内に腫瘍化することがあり、臨床応用には程遠い状況でした。そこで、さらに全てのアミノ酸の代謝解析を行い、腫瘍形成の原因となる未分化幹細胞がグルコースだけではなくグルタミンに依存した代謝機構を有していることを初めて明らかにし、その特徴を利用した未分化幹細胞除去および心筋純化精製法を開発しました（*Cell Metabolism* 誌 [2016 年] に報告）。我々が開発した培養液を用いた純化精製法は、標準的な心筋作製法として現在国内外の多くの研究者に活用していただくに至っています。

日本学術振興会特別研究員（PD）終了後は、臓器再生医学講座に移り、一度に約 10 億個の心

筋細胞を作製する2次元大量培養法を構築しました (*Stem Cell Reports* 誌 [2017年] に報告)。
 また、AMED 再生医療実現拠点ネットワークの研究代表者として、大学院生を指導させていた
 だきながら、ヒト多能性幹細胞において脂肪酸合成経路が活性化していることを見出し、その脂
 肪酸合成経路を抑制する化合物を添加するという簡便な手法により、他分野に応用可能な新たな
 未分化幹細胞選択的除去法を確立しました (*iScience* 誌 [2020年], *STAR Protocols* 誌 [2022
 年] に報告)。さらに、必須アミノ酸の1つであるトリプトファンがヒト多能性幹細胞の増殖に
 おいて極めて重要な役割を果たしていることを見出し、安価にヒト多能性幹細胞を増殖させる手
 法を開発しました (*iScience* 誌 [2021年], *STAR Protocols* 誌 [2022年] に報告)。他にも、
 大学院生と非臨床試験含め、心筋細胞移植治療を具現化するための多くのプロジェクトを進め
 て参りました (*J Heart Lung Transplant* 誌 [2021年], *J Am Coll Cardiol. BTS* 誌 [2022年]
 に報告)。

現在は、個性的で活気に溢れるメンバーと共に、重症心不全に対する心臓再生医療に限らず、
 創薬研究への応用や新たな治療法の確立を目指して、日々精進しております。最後になりました
 が、日頃よりご指導いただいている福田 恵一教授はじめ、上述の全ての方々、上述以外の関わっ
 てくださった全ての方々に、この場を借りまして心より感謝申し上げます。



これまで取り組んできた主な課題と代謝機構を基盤とした解決策

ヒトiPS細胞の樹立・増殖、分化心筋細胞の大量作製、分化心筋細胞の純化精製、分化心筋細胞の移植に至る全ての
 ステップを多能性幹細胞における代謝機構を主軸とした独自のアプローチにより新たな技術を確立し解決してきた。

山城 義人 先生（筑波大学 生存ダイナミクス研究センター 准教授
国立循環器病研究センター研究所 先端医療技術開発部 室長）

受賞研究テーマ

「大動脈瘤の基礎研究から見えてきたトランスレーショナル研究への道しるべ」
(What have we learned from basic research for aortic aneurysms so far?)



略歴

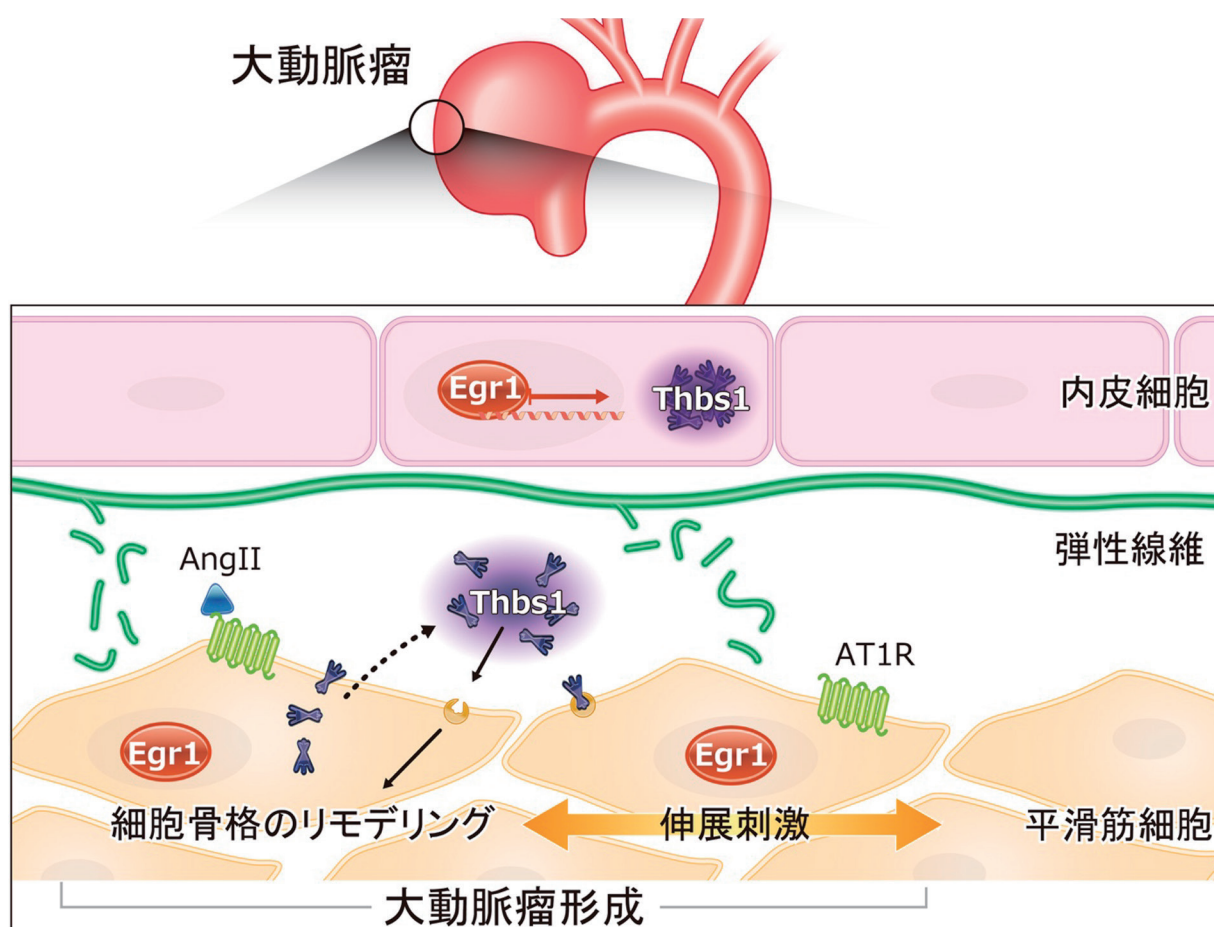
2011 年	琉球大学大学院医学研究科博士課程修了
2011 年	テキサス大学サウスウェスタン医学センター ポスドク研究員
2014 年	筑波大学 生命領域学際研究センター 助教
2018 年	筑波大学 生存ダイナミクス研究センター テニユア トラック助教
2021 年	筑波大学 生存ダイナミクス研究センター 准教授
2022 年	国立循環器病研究センター 先端医療技術開発部 室長 (PI)

—— 受賞によせて ——

この度は第4回中尾一和賞受賞を賜り、誠にありがとうございます。本賞はトランスレーショナル研究を推し進める御高名な諸先生方が受賞されてきた誉高い賞であり、身に余る光栄に存じます。日本心血管内分泌代謝学会の先生方、選考委員の先生方、中尾一和先生に心より御礼申し上げます。

私は大学2年生の頃、脾静脈が破裂し、一命を取り留めるという経験を致しました。幾つもの病院を回りましたが、残念ながら病因は分からないままでした。それならば、「自身で研究してみよう！」と思い立ったのが、基礎研究の道を志す初めの一歩となりました。学部では物理化学を専攻しておりましたが、大学院修士・博士課程は、琉球大学医学研究科の荻谷研一教授の下で、生化学や細胞生物学実験などの基礎医学研究に明け暮れました。2011年に学位取得後、動脈瘤のマウスモデルを開発された、テキサス大学サウスウェスタン医学センターの柳沢裕美教授の下で、ポスドク研究員として血管の研究に携わる事になったのが本研究を進める契機となりました。その後、細胞骨格を調整する cofilin や Slingshot-1 の活性化が大動脈瘤血管壁のリモデリングに重要であること (Yamashiro et al. Sci. Signal., 2015)、メカニカルストレス応答を担う細胞外マトリクス、Thrombospondin-1 が大動脈瘤血管壁に高発現し、Thrombospondin-1 の抑止が大動脈瘤発症の抑制に効果的であること (Yamashiro et al. Circ. Res., 2018) 等を報告して参りました。また、Thrombospondin-1 の上流では、プロテアーゼによって活性化される細胞表面受容体 PAR1 が活性化されること、Thrombospondin-1 と PAR1 は共に、ヒト胸部大動脈瘤の血管壁で発現亢進していることを報告致しました (Shin et al. ATVB., 2020)。これらの研究を通じて、血管壁のリモデリング機構が病態発症や血管の恒常性維持に重要であること、細胞外マトリクスが血管リモデリング機構に重要な役割を担うことを明らかにすることができました。

2022年9月より、国立循環器病研究センター研究所にて、室長として研究室を運営することとなりました。当センターが掲げる、循環器病の克服に対して、基礎研究の立場から貢献して参りたいと考えております。今回の受賞は、これを糧として更に精進すべく叱咤激励頂いたものと捉えております。本学会、そして若手研究者のために微力ながら尽力致しますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。末筆となりましたが、本研究は、筑波大学・生存ダイナミクス研究センターにて行った研究成果であり、教室主催者である柳沢裕美教授、秘書の東真理子氏、研究室メンバーの強力な支援体制の基で行いました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。



受賞者 - 1

伊藤 祐規 先生 (大阪大学大学院 医学系研究科 臨床遺伝子治療学,
大阪精神医療センター こころの科学リサーチセンター)

受賞演題

[A site-specific phosphorylation of tau protein induced by diabetes mellitus exacerbates behavioral defect in Alzheimer's disease mouse model]



略歴

2012 年	神戸大学 医学部保健学科 理学療法学専攻 卒業 (理学療法士)
2014 年	神戸大学大学院 保健学研究科 博士課程前期課程 修了 (保健学修士)
2021 年	大阪大学大学院 医学系研究科 医学専攻 博士課程 単位修得退学
2021 年	大阪大学大学院 医学系研究科 臨床遺伝子治療学 特任研究員
2021 年	大阪精神医療センター こころの科学リサーチセンター 特別研究員

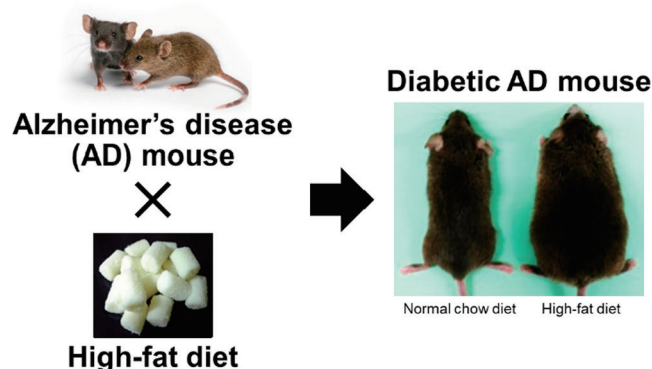
—— 研究内容および抱負 ——

この度は第 26 回日本心血管内分泌代謝学会若手研究奨励賞にご選出頂き、誠に有難うございます。大会長の向山政志先生並びに選考委員の先生方に厚く御礼申し上げます。また、日頃ご指導くださる森下竜一先生、樂木宏実先生、武田朱公先生をはじめ、研究をサポートしてくださる多くの先生方並びにスタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。

本研究では、糖尿病によるアルツハイマー病 (AD) 発症リスク増加の分子メカニズムを明らかにすることを目的に、脳内にタウ病理を呈するタウトランスジェニックマウス (AD マウス) に対して高脂肪食を負荷し、惹起した糖尿病病態が脳内タウ蛋白へ与える影響をリン酸化プロテオームにより網羅的に解析致しました。高脂肪食負荷により肥満、高インスリン血症、そして軽度の高血糖という糖尿病病態が惹起され、糖尿病合併 AD マウスでは認知機能障害の増悪と脳内タウ病理の増加がみられました。そして、糖尿病合併 AD マウス脳内ではタウ蛋白のリン酸化が特定部位でのみ増加しており、インスリンシグナル伝達経路を含む複数の細胞内シグナル伝達経路が有意に変動していました。以上の結果は、高脂肪食負荷により惹起された糖尿病病態が複数の細胞内シグナル伝達経路の変化を介してタウ蛋白のリン酸化を特異的なパターンで増加させることで、脳内タウ病理や認知機能障害を増悪させることを示唆していると考えています。

今後は、糖尿病と AD 患者脳内にみられるタウ病理の関連の鍵となる分子及びシグナル伝達経路の同定を目指し、本マウスの解析を継続する予定です。また、本研究で見出した特異的なリン酸化パターンを有するタウ蛋白の AD 治療標的や発症バイオマーカーとして利用可能性について、細胞・マウスモデル、ヒト検体を用いた検証を実施予定です。

この賞に恥じぬよう研究ならびに臨床活動により一層精進して参りますので、引き続き皆様からのご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

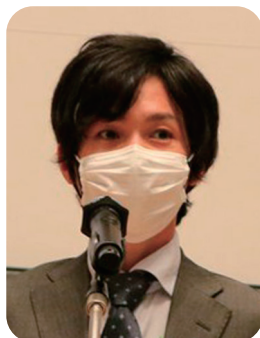


受賞者-2

尾崎 祐太 先生（名古屋大学大学院医学系研究科 循環器内科学）

受賞演題

[Role of the endocrine factor “myonectin” in maintaining skeletal muscle function]

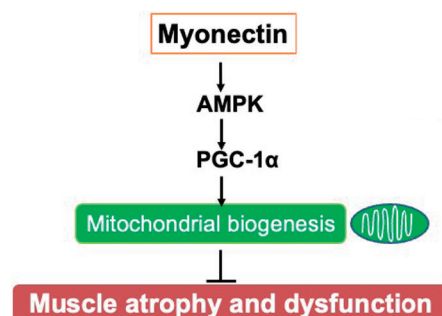


略歴

2012 年	名古屋大学医学部卒業
同年	安城更生病院初期研修 その後、同 循環器内科
2019 年	名古屋大学大学院医学系研究科 循環器内科学 大学院生 在学中

—— 研究内容および抱負 ——

この度は大変栄誉な賞を賜り大変光栄です。私は「骨格筋機能由来生理活性物質 マイオカインの骨格筋での役割の解明」をテーマに研究をさせていただいております。加齢に伴う骨格筋量と機能の低下を特徴とするサルコペニアは心血管疾患の病態との関連や健康寿命の短縮に繋がることが報告されています。その予防・改善には運動療法の有用性が示されていますが、有効な薬物療法は確立されていません。近年我々はマイオネクチンが心筋保護作用を有する運動誘発性マイオカインであることを報告しました。また高齢マウスの下腿筋におけるマイオネクチンの発現は、若年マウスと比較して顕著に低下していました。そこで本研究ではマイオネクチンの骨格筋機能に及ぼす影響について検討しました。坐骨神経切断誘導性筋萎縮モデルにおいて、マイオネクチン欠損マウスは野生型マウスに比べて筋重量が低下していました。除神経後の骨格筋では、マイオネクチン欠損マウスにおいてPGC1 α とミトコンドリア生合成関連分子の発現の低下、AMPKのリン酸化が低下していました。培養骨格筋細胞において、マイオネクチンはAMPK/PGC1 α 経路を介してデキサメタゾン誘導性の細胞萎縮を回復させました。一方、マウス骨格筋へのマイオネクチン投与はAMPKを介して除神経による筋重量低下を抑制しました。さらに、高齢マイオネクチン欠損マウスは野生型マウスと比較し、筋重量は減少し、筋力と自走距離も低下していました。早期老化を示すSAMP8マウスの解析では、マイオネクチン投与によりPGC1 α の発現上昇を伴う筋重量の増加を認めました。従って、マイオネクチンはAMPK/PGC1 α を介したミトコンドリア機能の活性化により骨格筋機能を改善する内分泌因子であると考えられ、サルコペニアなどの骨格筋機能異常に対する予防法・治療法開発の標的分子となる可能性が示唆されました。今後は治療への応用の可能性も含めて更に研究を進めていきたいと考えております。この場をお借りして本研究を進めるにあたり日々ご指導をいただいております名古屋大学 大橋浩二先生、室原豊明教授、大内乗有教授に厚く御礼申し上げます。

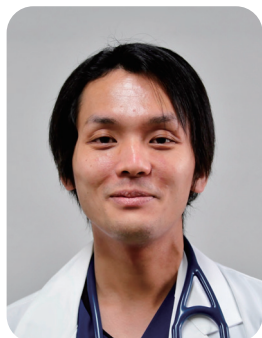


受賞者 - 3

藤本 大介 先生（熊本大学大学院生命科学研究部 腎臓内科学講座）

受賞演題

[Exploration of novel exosome-targeted strategy for diabetic kidney disease by drug library screening to inhibit intraglomerular crosstalk]



略歴

2010 年 3 月	熊本大学医学部医学科	卒業
2020 年 3 月	熊本大学大学院医学教育部	博士課程修了 博士（医学）取得
2020 年 4 月	熊本大学病院	腎臓内科 医員
2021 年 4 月	熊本大学病院	腎臓内科 特任助教
2022 年 4 月	熊本大学大学院生命科学研究部	腎臓内科学講座 助教（現職）

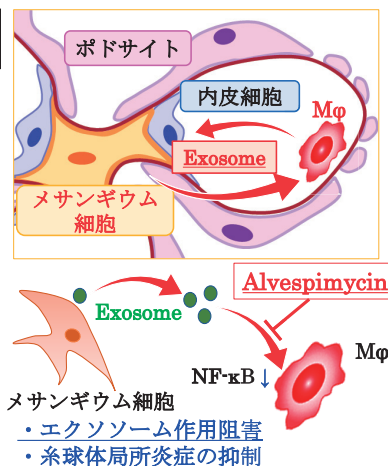
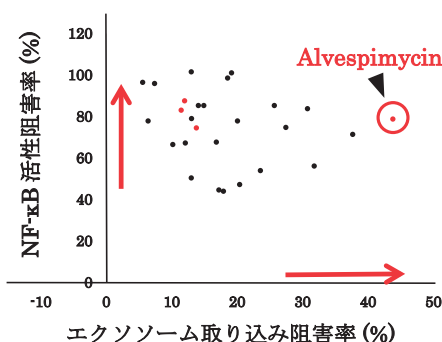
—— 研究内容および抱負 ——

この度は第 26 回日本心血管内分泌代謝学会若手研究奨励賞という栄えある賞を賜りまして、大変光栄に存じます。選考委員の先生方並びに研究を御指導いただきました向山政志先生、栞原孝成先生をはじめとした諸先生方に心から感謝申し上げます。

私は 2016 年に熊本大学大学院医学教育部に入学し、腎臓内科学講座を主宰する向山政志教授、栞原孝成准教授（現職）の御指導の下、糖尿病性腎臓病（DKD）の糸球体病変形成機序の解明及び新規治療法の開発を目指して研究を行ってまいりました。DKD 糸球体内では、局所炎症が惹起されていることや、各構成細胞間でのクロストークが病態に関与することが示唆されていますが、本研究ではメサンギウム細胞と浸潤マクロファージ間での、エクソソーム（Exo）と呼ばれる細胞外分泌小胞を介したクロストークに着目いたしました。In vitro の検討において、メサンギウム細胞由来の Exo がマクロファージに取り込まれ、NF-κB シグナルをはじめとした炎症を惹起することが示唆されました。そこで、この作用をブロックすることが糸球体内での局所炎症を抑制し、病態改善に寄与するのではないかと考えました。既存薬ライブラリーを元に、エクソソーム作用阻害効果、炎症抑制効果を有する化合物のスクリーニングを行い、有望な候補薬を見出すことに成功しました。現在、DKD 進展抑制効果の検証を進めており、動物実験の段階ではありますが尿蛋白減少効果が認められるなど、良い感触を得ています。

また、DKD 糸球体病態形成の更なる機序解明を目的としたシングルセル解析も同時に進めており、複雑かつ依然未解明な部分が多い DKD の病態を少しでも明らかにできればと考えています。今回の受賞を励みとして、DKD 治療に新たな光をもたらせるよう引き続き研究に邁進していく所存です。今後とも何卒御指導・御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

新規機序による DKD 治療薬
～エクソソーム阻害薬スクリーニング～



受賞者 - 4

南 喜人 先生（京都府立医科大学循環器内科）

受賞演題

[Liver lipophagy ameliorates nonalcoholic fatty liver disease through lysosomal exocytosis]



略歴

2012 年	北海道公立大学札幌医科大学医学部医学科	卒業
2012 年	社会福祉法人恩賜財団済生会滋賀県病院	初期臨床研修
2014 年	社会福祉法人恩賜財団済生会滋賀県病院	循環器内科
2017 年	京都府立医科大学大学院医学研究科博士課程	入学
2021 年	京都府立医科大学大学院医学研究科博士課程	修了
2021 年	近江八幡市立総合医療センター	循環器内科

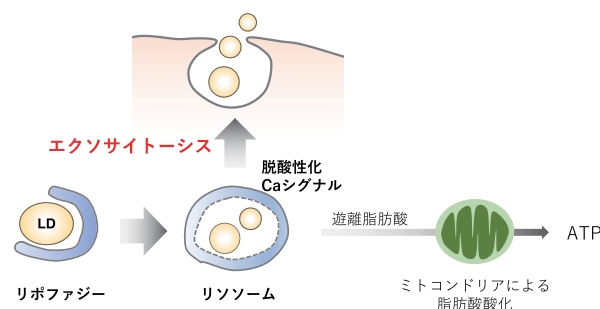
—— 研究内容および抱負 ——

この度は、第 26 回日本心血管代謝内分分泌学会若手研究奨励賞にご選出いただき、誠にありがとうございます。大変名誉な賞をいただき選考の先生方並びに関係者の方々に御礼申し上げます。

私達の研究室では、脂質選択的オートファジーであるリポファジーのメカニズムの究明と、リポファジーの臨床応用を目指しています。脂質蓄積疾患は全身の多くの臓器で問題となりますが、特に肝臓（NAFLD）においては高い有病率に反して有効な治療薬が乏しい事が問題となっています。

本研究では、初めにリポファジーを誘導する合成タンパク質を作製する事で、メカニズムの究明を可能としました。リポファジーは、一般的なオートファジーとは異なり、脂質を細胞外に放出する事で細胞内の脂質を減少させている事が明らかになりました。この経路は lysosomal exocytosis と言われています。リポファジーでは、オートリソソーム内の酸性度を低下させ、これが lysosomal exocytosis を誘導していたのです。肝細胞内の脂肪分解は、脂肪毒性の観点から肝炎を悪化させる事が知られていますが、リポファジーでは lysosomal exocytosis の経路を辿ることで、肝炎改善効果を有していました。これらの結果から、リポファジーの誘導が NAFLD 治療の新たな戦略となり得る事が示されたため、リポファジーを誘導する薬剤スクリーニングを行いました。結果として、FDA 承認薬であるジゴキシンがヒットし、更にマウスを用いた検証でも、リポファジーの誘導と NAFLD 改善効果を持つ事が判明しました。

ジゴキシンは心毒性など望ましくない効果も有している事から、現在我々のグループでは、肝臓特異的に取り込まれる新規ジゴキシンの作成に取り組んでいます。さらに、リポファジーには、冠動脈硬化症など多くの脂質蓄積疾患に対しても有効な治療法になり得る可能性があります。今後は、多くの脂質蓄積疾患への臨床応用を目指して研究に邁進していく所存です。



受賞者 - 5

山本 正啓 先生 (熊本大学病院 地域医療ネットワーク実践学寄附
講座 兼 循環器内科)

受賞演題

*[Human Epididymis Protein 4 Predicts Progressive Interstitial Fibrosis
and Cardiovascular Events in Patients with Dilated Cardiomyopathy]*



略歴

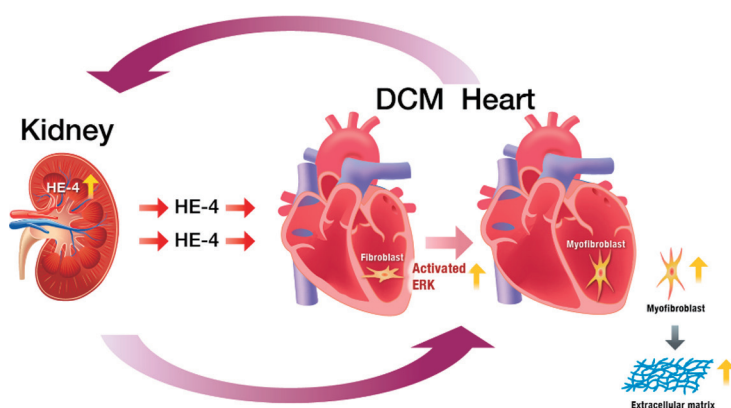
2011 年	鹿児島大学医学部医学科 卒業
2011 年	熊本大学病院 初期 / 循環器内科後期研修
2016 年	熊本大学大学院医学系研究科博士課程 入学
2021 年	熊本大学大学院医学系研究科博士課程 修了
2022 年	熊本大学病院 特任助教

—— 研究内容および抱負 ——

この度は、第 26 回日本心血管内分泌代謝学会若手研究奨励賞にご選出いただき、誠にありがとうございます。学会長の向山政志先生、ならびに選考委員の皆様にご心より感謝申し上げます。昨今の新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、2020 年からは多くの学会の発表形式が対面から WEB 形式に変わりましたが、このように対面形式での発表をさせていただき、審査員の先生方から大変勉強になるご指導を賜り、とても貴重な経験をさせていただきました。

私たちの研究チームは、Human Epididymis Protein 4 (HE4) に着目しております。HE4 は通常型の線維芽細胞 (fibroblast) には発現せず myofibroblast に特異的に発現する分泌タンパク質として注目を集めております。私は、ヒトの拡張型心筋症 (DCM) 症例群において HE4 の血中濃度が、心筋生検で採取した心臓組織の線維化の程度と相関すること、将来の左室リモデリングや心血管イベントと相関することを臨床研究から明らかにしました。また、基礎研究において、HE4 が他臓器由来の分泌因子として DCM における心臓の線維化および左室リモデリングに主体的に関与することを確認致しました。今後は、HE4 が心臓に作用する詳細なメカニズムの解明や、HE4 を抑えた際にどのような変化が心臓に起き得るのかといったことを解明すべく、引き続き研究を進めてまいりたいと考えています。また、今後も心筋症における進行性の心臓線維化や組織の変遷に着目し、心筋症や心筋炎に対する新たな治療戦略の確立を目指して参りたいと考えております。

最後になりましたが、今回の発表のみならず、日頃よりご指導いただいております花谷信介先生、荒木智先生をはじめ、医局および同門の諸先生方、スタッフの方々、辻田賢一教授にこの場をお借りして、深く感謝申し上げます。今回の受賞を励みとして、尚一層研究に邁進して参りたいと考えております。今後とも御指導、御鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。



日本心血管内分泌代謝学会役員名簿

■理事長

伊藤 裕 慶應義塾大学医学部腎臓内分泌代謝内科

■副理事長

吉村 道博 東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科

■理事

市原 淳弘 東京女子医科大学内分泌疾患総合医療センター高血圧・内分泌内科
小川 佳宏 九州大学大学院医学研究院病態制御内科学
東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科分子細胞代謝学分野
柏原 直樹 川崎医科大学腎臓・高血圧内科
栗原 裕基 東京大学大学院医学系研究科生化学分子生物学講座代謝生理化学分野
桑原宏一郎 信州大学医学部循環器内科学教室
児島 将康 久留米大学分子生命科学研究科遺伝情報研究部門
小室 一成 東京大学大学院医学系研究科循環器内科学
下澤 達雄 国際医療福祉大学成田病院臨床検査科
新藤 隆行 信州大学医学部医学科循環病態学教室
田村 功一 横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学
西山 成 香川大学医学部薬理学
深水 昭吉 筑波大学生存ダイナミクス研究センター
中川 修 国立循環器病研究センター研究所分子生理部
益崎 裕章 琉球大学大学院医学研究科内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座(第二内科)
南野 徹 順天堂大学大学院医学研究科循環器内科
向山 政志 熊本大学大学院生命科学研究部腎臓内科学
柳沢 正史 筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構(WPI-IIIIS)
樂木 宏実 大阪大学大学院医学系研究科老年・総合内科学

■監事

菅波 孝祥 名古屋大学環境医学研究所分子代謝医学分野
長瀬 美樹 杏林大学医学部解剖学教室(肉眼)

■幹事

小倉 彩世子 シャープ健康管理組合 東京健康管理室
岸 拓弥 国際医療福祉大学福岡保健医療学部
徳 留 健 国立循環器病研究センター研究所生化学部

■名誉会員【36名】

荒川規矩男	稲上 正	稲田 満夫	井村 裕夫	岩尾 洋	梅村 敏	江藤 胤尚
荻原 俊男	片山 茂裕	寒川 賢治	木之下正彦	小島 至	齊藤 壽一	猿田 享男
島本 和明	鈴木 洋通	高橋 伯夫	竹田 亮祐	田中 一成	富田 公夫	永井 良三
中尾 一和	中川 雅夫	成瀬 光栄	名和田 新	平田 結喜緒	藤田 敏郎	眞崎 知生
松岡 博昭	宮森 勇	村上 和雄	矢崎 義雄	泰江 弘文	吉永 馨	吉見 輝也
吉村 学						

■功労評議員【108名】

芦澤 直人	安部 陽一	飯利 太朗	池本 文彦	石川 三衛	石田 均	石橋みゆき
伊藤 貞嘉	伊藤 宏	井上 元	井上 達秀	今泉 勉	今城 俊浩	岩崎 泰正
岩本 安彦	臼井 健	内田 健三	浦 信行	浦田 秀則	大磯ユタカ	大津留 晶
岡村 富夫	小川 久雄	小野 美明	柏木 厚典	川口 秀明	河野 雄平	河邊 博史
河南 洋	菊池健次郎	木越 俊和	木曾 良明	北見 裕	北村 和雄	木村 定雄
木村 時久	久代登志男	熊井 俊夫	熊谷 裕生	倉林 正彦	上月 正博	河野 雅和
後藤 淳郎	小林 直彦	齋藤 能彦	笹野 公伸	佐藤 文俊	塩之入 洋	重富 秀一
七里 眞義	菅原 照	瀬戸 信二	相馬 正義	高木耕一郎	高須 信行	高野加寿恵
高柳 涼一	竹越 襄	武田 仁勇	千原 和夫	辻井 悟	蔦本 尚慶	東條 克能
徳留 悟朗	戸恒 和人	中野 茂	中村 元行	中元 秀友	成宮 周	西川 哲男
錦見 俊雄	西村 和修	西村 眞人	萩原 啓実	橋爪 潔志	橋本 隆男	林 晃一
檜垣 實男	久留 一郎	平井 愛山	平田 恭信	廣江 道昭	広瀬 茂久	福井 清
福田 昇	藤原 久義	梶田 出	松浦 秀夫	松澤 佑次	水野 兼志	光山 勝慶
南野 直人	宮崎 滋	宮崎 瑞夫	村上 治	村木 篁	森井 成人	森瀬 敏夫
保嶋 実	山路 徹	山下 博	山田 敬行	山本 繁樹	山本 格	家森 幸男
吉林 宗夫	吉政 孝明	渡辺 毅				

■評議員【157名】

赤澤 宏	浅原 哲子	荒井 宏司	有馬 秀二	有馬勇一郎	安藤 孝	池田 惠一
池田 康将	石上 友章	石川 義弘	石田 純治	泉 康雄	泉 裕一郎	泉家 康宏
市原 淳弘	一色 政志	伊東 宏晃	伊藤 裕	上田 陽一	海老原 健	大石 充
大谷健太郎	尾形真規子	小川 佳宏	小倉彩世子	尾上 健児	柿添 豊	笠原 正登
柏原 直樹	方波見卓行	勝田 秀紀	勝谷 友宏	加藤 丈司	神出 計	神吉 昭子
唐島 成宙	川上 利香	岸 拓弥	岸本 一郎	衣川 徹	木下 秀之	日下部 徹
栗原 裕基	桑原宏一郎	栗原 孝成	児島 将康	此下 忠志	小松 弥郷	小室 一成
酒井 寿郎	坂本 昌也	篠村 裕之	佐田 政隆	佐藤 敦久	佐藤 貴弘	佐藤 稔
沢村 達也	柴田 洋孝	島袋 充生	清水 逸平	下澤 達雄	下平 雅規	新藤 隆行
菅波 孝祥	菅原 明	杉本 研	杉山 徹	須田 道雄	曾根 正勝	園山 拓洋
染川 智	高橋 和広	高橋 克敏	高橋 貞夫	高橋 将文	鷹見 洋一	竹越 一博
武田 憲文	竹田 征治	田中 智洋	田中 愛	田辺 晶代	谷山 義明	種本 雅之
田村 功一	田村 尚久	土屋恭一郎	鶴田 敏博	寺田 典生	土居健太郎	東口 治弘
徳留 健	富田奈留也	永江 徹也	中岡 隆志	中神 啓徳	中川 修	中川 眞代
中川 靖章	長瀬 美樹	長田 太助	中谷 公彦	中西 道郎	永谷 憲歳	中山 智祥
中山 雅文	名越 智古	西山 成	野出 孝一	長谷川浩二	浜中 一郎	林 登志雄
原田 昌樹	東浦 勝浩	人見 浩史	廣岡 良隆	廣瀬 卓男	深水 昭吉	古橋 眞人
古本 智夫	細田 公則	堀尾 武史	本間康一郎	前島 洋平	榎野 久士	益崎 裕章
三浦伸一郎	水野 雄二	南野 徹	宮内 卓	宮里 幹也	宮下 和季	宮本 恵宏
向山 政志	宗 友厚	茂木 正樹	森 潔	森 研一	森 泰清	森下 竜一
森本 聡	八十田明宏	柳沢 正史	山下 潤	山原 陽子	山本 啓二	山本 浩一
横井 秀基	吉賀 正亨	吉田 尚弘	吉田 英昭	吉田 裕己	吉村 道博	吉本 貴宣
米田 隆	樂木 宏実	脇野 修				

■2022 年度新入会会員【20名】

岩瀬 晃康	岩橋 徳英	上間 次己	馬越 洋宜	尾崎 祐太	長田 啓史	金岡 知彦
来田真友子	柴田 茂	ZHAO YUNLU	瀬谷 大貴	高橋 弘武	礪波 一夫	林 浩也
船本 雅文	三上 夏輝	南 喜人	宮原 大輔	矢野 裕己	山本 正啓	

第 26 回 日本心血管内分泌代謝学会 評議員・総会 書面審議記録

日 時 : 2022 年 11 月 15 日～12 月 2 日

場 所 : CVEM ホームページ

評議員数 : 167 名

正会員数 : 355 名

【承認事項】

第 1 号議案 役員選任の件

第 2 号議案 名誉会員・功労評議員の件

第 3 号議案 評議員の件

(1) 新評議員について

(2) 再任評議員について

第 4 号議案 学術総会会長の件

(1) 第 29 回 (2025 年度) 学術総会会長の件

第 5 号議案 令和 3 年度 (2021 年度) 会計報告の件

(1) 令和 3 年度 (2021 年度) 一般会計

(2) 第 25 回 (2021 年度) 学術総会会計

【報告事項】

第 1 号議案 長期会費未納会員の件

第 2 号議案 研究賞の件

第 3 号議案 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞／永井賞選考委員の選任について

第 4 号議案 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞／永井賞推薦委員の選任について

第 5 号議案 2023 年度若手研究奨励賞(YIA)選考委員の選任について

第 6 号議案 学術総会準備状況の報告

第 7 号議案 会員数の現状報告

第 8 号議案 その他

(1) 日本心血管内分泌代謝学会の YIA 選考方法の変更について

(2) 会員連絡号の件

(3) 日本心血管内分泌代謝学会ホームページの件

2022 年度評議員会・総会については第 26 回学術総会が 3 年ぶりに対面形式となったが、諸般の事情により昨年同様書面審議の形態とさせていただいた。評議員会・総会の資料は CVEM ホームページに掲載し、書面審議依頼書をメール添付またはメール登録のない会員宛郵送により全会員に告知した。審議期限の 12 月 2 日までに評議員 71 名、一般会員 54 名から承認の回答があり、また、審議依頼書に期限までに回答のない場合は承認とみなす旨記載したのでほぼ全会員の承認が得られたものとみなされた。定款第 21 条で評議員会の承認には 2/3 以上の出席で過半数の賛成(56 名以上)、定款第 26 条で総会の承認には 1/3 の出席で過半数の賛成(87 名以上)が必要とあるので、今回の結果は評議員会と総会での承認が得られたものと判断できると考えられる。各承認事項を以下に示す。

【承認事項】

第1号議案 役員選任の件

今年度総会で年齢規定により任期満了退任となる理事は斎藤能彦理事(奈良県立医科大学)であることが報告された。4年の任期を満了する理事は小室一成(東京大学)、向山政志(熊本大学)の各理事で、いずれも再任されることが承認された。4年の任期を満了する監事、4年の任期を満了する幹事は該当者なしと報告された。

新理事や新監事候補者の該当者はなかった。第27回学術総会会長付幹事候補として小倉彩世子評議員(シャープ健康管理組合 東京健康管理室)が承認された。

第2号議案 名誉会員・功労評議員の件

今年度満70歳を迎える功労評議員で名誉会員の候補者は該当者なしと報告された。

功労評議員候補者として伊藤 裕(慶應義塾大学)、井上 元(日本赤十字社 和歌山医療センター)、臼井 健(静岡社会健康医学大学院大学)、大津留 晶(医療法人耕雲会 おおつる内科医院)、柏原直樹(川崎医科大学)、北見 裕(朝倉内科循環器科クリニック)、小室一成(東京大学)、佐藤文俊(東北大学)、中野 茂(町立志賀クリニック)、中元秀友(埼玉医科大学)、錦見俊雄(わかくさ竜間リハビリテーション病院)、西村真人(桃仁会病院)、山本繁樹(医療法人 山本内科クリニック)の13名の各評議員がそれぞれ承認された。

第3号議案 評議員の件

(1) 新評議員について(任期:2022年総会~2026年総会)

令和4年度新評議員候補者として以下1名が承認された。

有馬勇一郎(熊本大学国際先端医学研究機構 循環器内科)

(2) 再任評議員について(任期:2022年総会~2026年総会)

4年の任期を満了する任期満了評議員として、以下の48名の再任が承認された。

荒井宏司、池田康将、上田陽一、海老原健、大谷健太郎、大津留晶、尾形真規子、小川佳宏、柏原直樹、岸 拓弥、岸本一郎、桑原宏一郎、小室一成、佐藤敦久、佐藤 稔、清水逸平、下澤達雄、新藤隆行、菅原 明、高橋貞夫、鷹見洋一、田辺晶代、谷山義明、土屋恭一郎、鶴田敏博、寺田典生、中岡隆志、中神啓徳、錦見俊雄、西村真人、西山 成、廣岡良隆、古橋真人、堀尾武史、宮内 卓、向山政志、茂木正樹、森 潔、森下竜一、山本浩一、山本繁樹、横井秀基、吉賀正亨、吉田英昭、吉田陽子、吉村道博、吉本貴宣、樂木宏実の各評議員。

第4号議案 学術総会会長の件

(1) 第29回(2025年度)学術総会会長の件

第29回(2025年度)学術総会会長に田村功一理事(横浜市立大学 医学部 循環器・腎臓・高血圧内科)が承認された。

第5号議案 令和3年度(2021年度)会計報告の件

(1) 令和3年度(2021年度)一般会計

令和3年度の一般会計について、前期繰越金20,600,523円、会費収入1,953,000円、受取利息122円、高峰賞寄附金1,000,000円、中尾賞/永井賞寄附金100,000円、学術総会会計繰入金844,709円、収入合計24,498,354円、当期収入は3,897,831円、支出は印刷費15,400円、通信運搬費123,532円、人件費1,084,000円、旅費交通費0円、YIA表彰費(副賞)600,000円、YIA表彰費(記念品代)4,400

円、高峰賞関連費 892,450 円、中尾賞・永井賞関連費 0 円、負担金（振込手数料）29,970 円、各種委員会・会議費 0 円、事務局家賃 250,000 円、事務費 290,400 円、支出合計 3,290,152 円、当期収支差額 607,679 円、次期繰越収支差額 21,208,202 円であると報告された。

(2) 第 25 回（2021 年度）学術総会会計

第 25 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会（児島将康会長（久留米大学））は、2021 年 12 月 10 日～11 日ライブ・オンタイムで web 配信された。第 29 回日本血管生物医学会学術集会、第 38 回国際心臓研究学会日本部会、第 57 回高血圧関連疾患モデル学会学術総会および第 43 回心筋生検研究会学術集会との合同開催で実施され、CVEM 単独で 85 名の参加者であった。学術総会の収支は、収入が 3,265,032 円、同額の支出で、納税充当引当金 42,000 円は学術総会会計繰入金口座に入金されたことの報告であった。

菅波監事と長瀬監事により行われた監査より、一般会計報告および学術総会の会計処理は適正に行われている旨監査報告書が示され、上記会計報告は承認された。

各報告事項を以下に示す。

【報告事項】

第 1 号議案 長期会費未納会員の件

2017 年から 2018 年までの会費未納者名（一般会員 15 名）については、前年度末（令和 3 年 3 月末）までに会費納入いただかず自動的に退会処理したことが報告された。今後も 3 年以上連続して会費未納者で会費納入にご賛同いただけない場合は自動的に退会処理させていただく旨報告された。

第 2 号議案 研究賞の件

第 2 号議案(1) 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾一和賞の件

第 26 回高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・第 4 回中尾一和賞選考委員会は 2022 年 6 月 6 日 web 会議で開催され、受賞者が決定された。

◆第 26 回（2022 年度）高峰譲吉賞 受賞者

吉村道博（教授） 東京慈恵会医科大学 内科学講座 循環器内科

◆第 26 回（2022 年度）高峰譲吉研究奨励賞 受賞者

遠山周吾（専任講師） 慶應義塾大学 医学部 循環器内科

◆第 4 回（2022 年度）中尾一和賞 受賞者

山城義人（准教授） 筑波大学 生存ダイナミクス研究センター

第 3 号議案 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞／永井賞選考委員の選任について

◆2023 年度年度高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞／永井賞 選考委員の件

選考委員長：伊藤 裕（慶應義塾大学 医学部 腎臓内分泌代謝内科）

年次会長：下澤達雄（国際医療福祉大学 成田病院）

継続委員：市原淳弘（東京女子医科大学 内分泌疾患総合医療センター 高血圧・内分泌内科）

栗原裕基（東京大学 大学院医学系研究科 生化学分子生物学講座 代謝生理化学分野）

桑原宏一郎（信州大学 医学部 循環器内科学教室）

候補者名:任期2年 2022年総会～2024年総会まで

新藤隆行(信州大学 医学部医学科 循環病態学教室)

西山 成(香川大学 医学部 薬理学)

益崎裕章(琉球大学 大学院医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座(第二内科))

第4号議案 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞/永井賞 推薦委員の選任について

◆2023年度年度高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞/永井賞 推薦委員の件

任期2年 2022年総会～2024年総会まで

推薦委員長:樂木宏実(大阪大学 大学院医学系研究科 老年・総合内科学)

委員: 児島将康(久留米大学 分子生命科学研究科 遺伝情報研究部門)

中川 修(国立循環器病研究センター研究所 分子生理部)

深水昭吉(筑波大学 生存ダイナミクス研究センター)

向山政志(熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学)

第5号議案 2023年度 若手研究奨励賞 選考委員の選任について

◆2023年度 若手研究奨励賞 (YIA) 選考委員の件

選考委員長(2023年度学術総会会長):

下澤達雄会長(国際医療福祉大学 成田病院)

継続委員:任期2年 2021年3月総会～2023年総会まで

有馬勇一郎(熊本大学大学院 生命科学研究部 循環器内科)

武田朱公(大阪大学 大学院医学系研究科 臨床遺伝子治療学講座)

吉田陽子(順天堂大学 大学院医学研究科 先進老化制御学講座)

候補者名: 任期2年 2022年総会後～2024年総会まで

鮎澤信宏(東京大学 先端科学技術研究センター 臨床エピジェネティクス)

小山晃英(京都府立医科大学 大学院医学研究科 地域保健医療疫学)

藤生克仁(東京大学 医学部附属病院 循環器内科)

第6号議案 学術総会準備状況の報告

第27回(2023年度)学術総会 下澤達雄会長(国際医療福祉大学 成田病院 臨床検査科)

今までとは異なった形式で研究成果の議論の場としてオンライン会議システムを用いて実施、KeyNote Lecture と一般演題を中心に企画している。一般演題が集まるかが問題、ディスカッションはSlack を使ってオフラインで話し合う仕組みを導入、参加費用は1回千円、年間4～5千円程度、非会員との差額は設けない予定。高峰譲吉賞・研究奨励賞などは書面審議なので従来通り実施予定。予算案は30万を想定、理事の先生方に若手の医療従事者が17:30からのズーム集会に参加して頂けるよう協力を要請された。

第28回(2024年度)学術総会 小川佳宏会長(九州大学 大学院医学研究院 病態制御内科学)

2024年の秋頃に1日で、CVEM単独のオンライン開催、テーマは「CVEM and beyond (仮)」を予定している。

第7号議案 会員数の現状報告

2022年9月1日現在

正会員 355名 (年会費 3,000円)

評議員	141 名	(年会費 5,000 円)	※理事・監事・幹事除く
理事	21 名	(年会費 10,000 円)	
監事	2 名	(年会費 5,000 円)	
幹事	3 名	(年会費 5,000 円)	
功労評議員	98 名		
<u>名誉会員</u>	<u>36 名</u>		
会員合計	656 名	(2021 年 1 月 12 日時点では 675 名)	
全会員が年会費を納入した場合		会費収入	2,005,000 円

参考：休会中の会員 46 名

第 8 号議案 その他

(1) 日本心血管内分泌代謝学会の YIA 選考方法の変更について

第 27 回 CVEM 学術総会下澤会長から、2023 年度の学術総会が年間を通しての web 学会となることから、YIA 選考方法を 2023 年度に限り下記の通り変更したい旨提案があり、承認された。

「一次審査で 10 名以下に絞り、二次審査を行い若干名を選考し、授与する」を

「一次審査で若干名に絞り、二次審査は 9 月 6 日（水）10 月 11 日（水）11 月 8 日（水）17 時 30 分よりオンラインにて開催予定の学術集会において順次口演し、審査を行う。すべての口演終了後、審査委員の審査結果に基づき選考委員会で受賞者若干名を選考し授与する」に変更する。

(2) 会員連絡号の件

第 43 回理事会（2019 年 12 月 13 日開催）で会員連絡号が冊子体からホームページ掲載による電子媒体へ変更することが承認されました。2022 年度の連絡号は来年 2 月末になる予定です。

(3) 日本心血管内分泌代謝学会 ホームページの件

ホームページアドレス : <http://square.umin.ac.jp/cvem/>

掲載のご要望やご意見など、事務局までお寄せ下さい。